（添付資料１）

最優秀賞
文部科学大臣賞

一歩、前へ
秋田県湯沢市立湯沢北中学校
二年 永　嶋　早　希

「きっと、君に向いているんじゃないか。」小学校六年生の私に、担任の先生は言った。認めてもらえたような気がして、なんだかうれしかった。その一言は、今も心のどこかに焼きついている。

この夏休みに、職場体験学習が行われた。実際の職場で仕事を体験し、働くことについて知る学習である。体験するのであれば、将来の役に立つ仕事の方がいい。私は慎重に選び抜き、新聞社の支局に決めた。

ここを選んだ理由。それは、小学六年生の時の出来事がきっかけだった。読書が好きな私は、新聞一面にあったコラムを読み始めた。ベテランの記者が、時事問題に逸話を加えて書いているものだ。読みごたえのある文章に私はたちまちとりこになっていた。夏休みの自由研究は毎日それをノートに貼り、感想を書いた。読み手を引き込むような文章が書ける記者になりたいと、いつしか思うようになった。自分の中で生まれた初めての夢だった。ノートを読んだ担任の先生は、そっと、

「きっと、君に向いているんじゃないか。」

とほめてくれたのだ。現在の私の、夢を追う原動力になったのである。

私にとって大人の世界に一歩を踏み出すための、そして夢への「挑戦」となる職場体験が始まった。戦没者追悼式の取材に同行させてもらえるということで、炎天下の中、必死に自転車をこぎ文化会館へ向かった。

式は毎年、市の遺族らが参列し、御霊をなぐさめているという。今年は戦後七十年という節目の年で、各報道で何度も取り上げられるのを見聞きするが、私自身進んで知ろうとしているかと言われれば、自信が無い。自分から戦争に触れるのは初めてで、不安と大きな戸惑いがあった。どんな顔で式場にいたらいいのか、わからなかった。

ふと支局長を見ると、すでにメモをとっていた。「伝える」体制が整っているようだ。「事実を受け止め、読者へ忠実に届けなくてはいけない。」という支局長の言葉を思い出し、私は気持ちを切り替えて式に臨んだ。

厳かな雰囲気の中、追悼の言葉が述べられていき、私はペンを忙しく走らせ

た。座っているのは、私にとっては祖父母の世代の方々。曲がった背中に、さみしさが重くのしかかっている。「平和は、戦没者の犠牲の上に築かれてきた。」当たり前のような毎日も、本当はかけがえのないものだということに気づかされた。日常のほんのささやかな幸せの場面が、頭をよぎっていく気がした。

献花の時には撮影も体験した。一眼レフのファインダーをおそるおそるのぞくと、張りつめた空気が漂っていた。参列者らは、どんな大切な人を奪われたのか。胸が痛んだ。そう感じる間にも、時間は淡々と過ぎていく。この一瞬を逃しては「伝える」ことができないと、手を震わせながらシャッターを切っていった。

記者の難しさをずっしりと感じながらも、時間を経るごとに、私の中で「伝えたい」気持ちが増していく。一人で物事をするのは、気が引ける時もある。だが記者は違う。なぜなら、目の前のものを見聞きし肌で感じ、「伝える」使命を負っているからだ。

式の後、参列者にインタビューする時間があった。相手は、南方戦線で父を亡くし妹と苦しい生活をしたという七十代の男性で、「悲しみは一日も忘れなかった。」と追悼の言葉を述べた方だった。しかしインタビューで、「戦後、近所の方、親戚の支えがありがたかった。」と話された。式だけではわからなかった心の中にある思いだった。男性の硬い表情が解け、声に温かさが生まれたのを見て、お話を聞けて良かったと素直に思った。

戦争を知らない世代は八割に上る。だが、知らなくていいはずはない。私たちには、学び語り伝える義務があることを痛感した。

翌朝、早速掲載された記事を読んだ。写真も文も、遺族らの平和への思いを伝えていた。支局長は、「厳しい仕事だが、人とのつながりを持てる楽しさがある。」とおっしゃっていた。人の心の結びつきを持ってこそ、「伝える」ことができるのだと思った。支局長の、報道人としての熱い志を学んだ。

「おっ、未来の記者の卵か。頑張ってな。」取材中、声をかけられて励みになった。身近でささいなことも自分で見て、自分のこととして考える。そんな観察力を養うことができたように思う。一つ「成長」できた気がした。

報道の仕事に就くという夢は、私にとってやはり変わらない。けれど、人の心の中の思いに寄り添い、「伝える」ことができるような記者になりたい、と強く思った。まだまだ踏み出したばかりの一歩。好奇心を持ち続けながら、さらに視野を広げていこう。たくさんの経験を積み重ね、大人になっていきたい。